新緑の森番

樹夏 青日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新緑の森番

【Ｎコード】
Ｎ２５４１Ｊ

【作者名】
樹夏　青日

【あらすじ】
最後の森を監視下におくカノープス。
その国の姫スピカが今代の森番
森番は森を守り繁栄させるもの
昨年末先代の森番が死んでしまった、複雑な結界をのこして……
また今だ忙しいスピカの元に現れたのは隣国の王様アラフスとその使いルサス……

アラフスはスピカの姉ネカルと婚姻関係を結びに来たらしいが……

スピカの周りではいつも何かが起こる
新米森番スピカの奮闘記とその周りのもののお話

はてさて恋愛してる暇はあるのかな？？

新米は前途多難！？

「おい！いつまで歩くんだよ？」
体全体を覆うような長い黒いマントをまいた金髪の男が訊ねた。
「ここが一番の近道ですから。」
金髪の男と同じマントをまいた黒色の髪の男が答えた。
「どこがだ！こんな偽の森の中なんか歩いて、木がおおい茂り過ぎて馬一頭すら入れないじゃないか。」
「はぁだからこれだから・・・・。」
「なにが言いたい？」
「・・・・なんでもありませんよ」
男はその男の言葉を受け流し先を急ぐため歩調を速めた。
「なぁ、なんだか体全体が痛くなってきたんだ・・・が？」
男は不思議そうに前を歩く男に訊ねた。
前を歩く男はただ微笑みひとつ頷いた。
「あの子も成長したね・・・」
と一言言うと進路をいきなり変え森から抜け出して外の道を歩きはじめた。
「おい、今度はなんだ？さっきの方が近道だったんじゃないのか？」
「大丈夫ですよ、少し到着が遅れてしまうだけですからまぁ時間的には全然余裕ですし」
そして二人は目的地でもある小さな国に辿りついた。

「国には辿りついたがな、ルサスどうしてさっき途中で森を外れたんだ？」
訳が分からないといった様子で男は尋ねた。
「失礼ですが今のアラフス様とは全くの関係がない故説明はまた今

度とさせていただきます、というか知っても意味ないしな・・・・」
最後の方はほとんど息と同じ音でしか言われなかった。
「さぁ着きましたよ、この世界でただ唯一真性の“森”を所有する国カノープスの城に」
ルサスは大げさに両腕を広げた。
「複雑だよな、その森を守るためにわざわざ隣国と縁組を結ぶなんて」
「あちらの方も“森”を守るために必死なんでしょ」
その事実は至極重大なことなのにルサスの口からは何でもないかのように流れ出た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「女王陛下セントトレス国のアラフス様とルサス様がご到着なされました」
「わかった、そうじゃな第一の間にでも案内せよ」
凛とした透きとおるような女性の声が部屋に木霊した。
「女王陛下ジハール国のアセルス様とサイダク様がお見えになられましたが・・いかがなさいますか？」
「・・・・ついでだそ奴らも第一の間に案内しておけ」
「ということは、ついに決着をつけるおつもりなのですね？」
使いの者は少し不安げに尋ねた。
「なにも案ずるではない、この縁組は第二王女ネカルとのものです先代の森番がお亡くなりになられて国も森も安定していない、今ここで経済的に安定を求めただけですよ・・・不安ですか？」
女王は安心させるように微笑えんだ。

使ぃの者は安心し一礼するとドアにむかい歩きはじめた、ちょうどそのタイミングで息を切らせたもう一人の使ぃの者が部屋に入ってきた
「女王陛下大変です！ネカル様がこの城のどこにもおりません、村の者の話によるとまた馬を走らせ自分の領土へと行ってしまわれたようです」
「あんのバカ娘が・・・」
女王は疲れたように立ち上がりまわりにいたものに一声に指示を出した。
「この城に居る仕えの者は半分が第一の間の警護をせよ、あとの半分はネカルを探してこい、あぁあと一人森へ様子を見に行ってくれまだまだ不安定だからな、私はこれから第一の間に向かう城の警備も怠るなよ」
テクミネはヒールを鳴らしながら颯爽と第一の間に向っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「森に入るのに1年、１年の間に森は少し均衡を失ぃかけていたみたいだけどさすが叔父様大丈夫そうね・・・って私が言えた立場ではないけどさ」
森の中をくまなく観察するようにあたりをキョロキョロ見ながら一人の少女は歩ぃていた。
少女は青緑がかった黒色の髪を一つに括り森の花を見つけては手入れをし木を見ては触って様子を見ていた。

すべての植物にそうするとようやく森を一周し日は落ちかけてきれいなオレンジ色の光が少女の頬を照らしていた。
「よし、今日はこんなもんかな・・・じゃあ最後に」
少女は森と村の境目まで来ると立ち止まり村を背にして森に向い呪文を呟いた

――――森が揺れた――――

少女は眼を見開いて驚き森の一角へと全力疾走していった。
・・・数分後、少女は涙目になりながらも先ほどと同じ呪文を呟き、目を擦りながら城へと戻って行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、そなたらは何の用じゃ？」
「テクミネ、もちろん我が息子サイダクと今代の森番との婚約について話にきたのじゃ」
アセルスは意地の悪そうな笑みを浮かべ答えた。
「あいわかった、でそちらは？」
「アラフス様の代わりに私がお答えします、今代森番であられる第二王女のネカル様との婚約についてのご相談です。」
使えのルサスはアセルスに見せつけるように答える。

「そうか、双方ともに用件がいっしょとな・・・判断はこの国の女王である私に一任で構わないな？」

「「大丈夫ですとも」」

「ではさっそく・・・第二王女ネカルとの婚約はセントレス国の国王アラフスにする、判断基準はこうじゃ、まずアセルスよそなたの国は大国であり国自体も安定しておる今急いで後継ぎを作らずとも安心じゃそれに対して大国ながらも若くして即位したアラフスは民からの信頼がまだ足りぬななので今妃を迎えておけば一安心じゃ・・・ってなところかの」

アセルスとサイダクは立ち上がるとテクミネに一礼し部屋を後にした。

「でじゃアラフス殿家の馬鹿娘は今おらぬ、小国だが見学でもしてからお帰りになられるか？」

テクミネはやさしく聞くとアラフスは立ち上がり

「いえ、ネカル様が帰るまで待たせていただきます、その間は観光なりしております故ご心配なさらず」

「そうか・・・では案内役に一番下の姫スピカをつけようかの、将来妹になるのじゃ仲良くしておけよ」

・・・・・・そう言うとルサスが勢いよく立ちあがり、椅子が後ろに倒れ激しい音がしたそのことにアラフスが注意しようとするがルサスは気にも留めずテクミネのそばまで行き何やら二人で話始め

た。
駆け寄ろうとした兵士達をテクミネは片手で制しルサスと話し込んでしまった。
アラフスはルサスが倒した高価な椅子をしぶしぶもとに戻し二人を見て当分話が終わらないなと察し指先で暇を持てまし始めた。

ルサスは眉間に皺を寄せ小声で聞いた
「なぁ王女様、何でスピカ様をつける？意味分かってるのか？」
テクミネは渋い顔をしながらやはり小声で答えた
「様付けやめろ、スピカは森で忙しいが少し世間を見ておいた方がいい」
ルサスは妹の心配をするように瞳を揺らした
「つっても森番だぞ？唯一の存在だぞ？もしもの事があったら・・・」
「あの子の性格知ってるのか？だいたい森番も後継ぎが欲しいというか必要だからなもしネカルよりも・・・ってなった場合は私は何も言わないさ。」
テクミネはさぞかしおかしそうに肩を揺らした
「おい、それは少し横暴じゃまあ俺としては使いの者として正式な方向で頼むよ」
ルサスは諦めたようにしかしなんだか悔しそうにテクミネアから体を遠ざけると自分のもと席に戻って行った。

（おい、テクミネ様と何話していたんだよ？）

（内緒です、私と陛下との話ですからさぁ部屋に行きましょうか）

（おぃおい！あぁもう・・・じゃあゆっくりと観光でもするか）

「国王申し訳ないが今ネカルが居ないため末の姫スピカに国の案内を頼んだのでしばしお待ちいただきたい。」
「わかりました、では失礼します」
アラフスとルサスは控えのものに連れられて客室へと消えていった。
ふぅ〜、テクミネは一息付くと執務室へと戻って行った。

「スピカを呼んでくれ」
「わかりました」
執務室にいた長男のレグルスは紙束を抱え部屋から出ていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

「もぉ誰よ・・・グスッ」

（あぁもうこんな時間、早く戻らないと母様に怒られる）
涙目をごしごし擦りながらスピカは自分の部屋へと向かっていた。
「お～いス・ピ・カ！！母上様が呼んでますよ」
とそこへレグルスの声が廊下に木霊した
あ～あ、今日はついてないってか私何かしたのかな？
「わかった、いつもの執務室で大丈夫？」
「大丈夫！俺は客人の相手してくるから一人でよろしくな」
「えぇ～というか、そんなに上客な相手なの！？」
「まぁ・・・何というか、ぼちぼち・・・・？」
（え？ぼちぼちって何・・・一番困るわそういうの）
スピカはレグルスに向ってにっこりと笑うと双方それぞれの場所に向い歩いて行った。
コンコン・・・
「失礼いたします、スピカですがお呼びですか？」
「おぉなかなか今回は速かったの、お前その眼はどうした？」
「・・・・・・・・なんでもないです」
「私に嘘をつくのか？」
「今回だけは、森番絡みですから・・・」

「じゃあしょうがないな、で本題だがな・・・」

（うわー今日は何言われるんだろ、精神的にきついっ！）

スピカは過去の経験から下を向いていた。

「今大国セントレスの国王アラフス様とその使いルサス様がいらっしゃっている」

スピカはルサスのところで肩を異常にビクつかせた

「アラフス様の今回の訪問の目的はネカルとの婚約だがネカルは今居ない、そして帰ってくるまでに時間がかかる、そこでお前にアラフス様の観光の案内役を務めてもらいたい」

（最悪―森もやっと安定してきたのに、これから毎日手入れに行かないと・・・とか考えていた矢先ですか～タイミング悪すぎですよー皆様）

スピカはテクミネに聞こえないように溜息をつくと笑顔をつくって顔をあげ満面の笑みでその役割を受けていた

「わかりました、私に少ない外交のチャンスを下さってありがとうございます。精一杯頑張らせていただいますわ」

そう言うとスピカはテクミネから詳細を聞くと自室に戻り服装の準備を始めた。

コンコン

「失礼いたします、使いの者でございますが真ん中の刻よりスピカが案内を始めるそうなのでこの部屋でお待ち下さいとのことです」

「わかりました・・・ルサスおまえはどうする？」
隣でくつろいでいたルサスにアラフスが問いかけた
「久々だからな～外交でもしてるから一人で行ってきて下さいな」
「ということだ、よろしく頼むぞ」
「かしこまりました、ではごゆるりと」
レグルスは紙の束を抱えなおし、執務室へと急いだ。

「母上入りますよ」

レグルスが入るのと同時にスピカが出て行った。

「母上、ルサス様はこの後真ん中の刻より母上と外交をしたいとの申し出がありましたが」
「わかった、・・・・さっきな・・」
いきなり母親の顔で話し始めたテクミネにレグルスは戸惑いを感じながらも相槌をうった。
「スピカに無理をさせてしまったよ、無理に笑顔なんか作ってあの子はただでさえ森番として忙しいのに、私とした事がそんな事すら考えがおよばなかったなんて、なんて情けない・・・」
泣き出してしまいそうな悔しそうな珍しいテクミネの声にレグルスは戸惑った
「あまり弁解ができなくて悪いけど、まぁスピカもこれが初めてだしやってみないと分からないからな・・・ダメそうだったら途中で変えてやればいい」
なんとか自分の意見を言うと一息
「それで大丈夫だろうか・・・・」
いつになく弱気な母にレグルスは本当に困りはじめた
「大丈夫さ、そんな事を考えるなら今は一刻も早くネカルを連れ戻

すことだね」
テクミネは深く重い溜息をつくと目を閉じて苦しげに息を吐いた。
レグルスは紙束をテクミネの机に置くと自分もとネカル探しに出かけたのであった。

＊＊

「失礼いたします、本日アラフス様の案内役を承りましたスピカと申します」
「アラフスだよろしく頼むぞスピカ殿」
では参りましょうか・・・
片手でドアを開けスピアはアラフスを促した。

こちらがこの世界で唯一の“森”ですわ
でこちらがカノープスのメイン通りで一番大きな市場になりますわ
「あ！おばちゃんこんにちは」
「スピカじゃないか、久し振り！また買い物に来てくれよ」
「近いうちにね」
市民と仲がいいんだな・・・
えぇよく来るものですから・・・・・
でこちらが・・あ！あちらが・・・あの川ですが・・・・

日はもうすぐ沈みそうで夕焼けの反対側には漆黒の闇が広がっていた

「では今日はこの辺りで明日にはネカル姉様がお帰りになられると思いますので、明日はお城の中でお過ごしください。」
「わかりましたでは本日はおりがとうございました」
「いえいえこちらこそ姉様が帰ってこられるといいですね」
「えぇほんとに・・・では」
「失礼いたします」

スピカは暗くなった城の廊下を執務室へと歩いて行った。
コンコン・・・・失礼します
「アラフス様を案内してきました、明日には姉様は帰られますか？」
「うぅんむ・・・それがじゃな・・・」
「どうかいたしましたか？」
テクミネが渋っていると後ろからレグルスが現れた。
「俺が説明しようか・・・？母上様」
「あぁそうしてくれ・・・」
「まずな、ネカルなんだが今日俺が国の外れで見つけて連れて帰ってきた。」
「まあ、ほんとですか！？」
「あぁレグルスはしっかりとやってくれた・・ありがとう」
「が！！しかしだ、ネカルがな・・・《私が逃げたのは謝るけどさ、アラフス様には会ったことがない、だから案内役として回っている時の素の彼が見てみたい！だからあと数日は私は帰らないことにしてスピカが案内しているアラフス様を数日分尾行させてもらうわ》・・・ってことだスピカあと数日頑張ってくれ」
「え！？森は！誰が見るのよ」

反抗したスピカの目の前には諦めきった二人が目に入りスピカは諦めることにした

「・・・・・・わかりました、失礼いたします」

「あ～あ、またやっちゃった」
廊下では小さく小さくつぶやいた。
廊下には小さな嗚咽と靴音だけが響いていた

「またやってしまったなぁ」
「しょうがないと言ってしまえばそれで終わりですが、今回のは少しひどいですね」
「あぁスピカ、ごめんな」
「とにかく早くネカルとアラフス様が結婚すればね」
「あぁ今日はこれまでで大丈夫だよ、ありがとうおやすみ」
「はい、おやすみなさい」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ジリリリリリリリリリー
「あ～もうこんな時間昨日森に行けなかったからな」
スピカは森番であるため毎日森に行かなくてはいけない
しかし昨日は突然の公務で行けなく、これが数日続くといわれると
行くのははやり朝になる。
というわけで只今朝日も昇らぬ早朝
「昨日泣いたせいで目が酷いわ」
「でも森には行かないと昨日行けなかったから・・・警備の人には
母様が話をつけてくれているだろう」
スピカは身軽な服装に着替えると、髪を今日はお団子にして走って
森にむかった。

＜あ～ぁスピカ頑張っちゃって大変だね森番も＞
城の屋根からマントに身を包んだ男の声がまだ暗い闇にしみていった

無知という名の見えない刃（前書き）

今回はスピカちゃんに精神面的にも肉体的面でも頑張ってもらいます。
まだまだ恋愛要素はなく・・・でも誰とくっつくかだいたいわかるかな
ではどうぞ！

無知という名の見えない刃

「あぁ～よかった、大体は変わってないわね・・・・」

スピカは森を一周ゆっくりと歩いて回った。
結果変わっていたのは木が一本倒れてしまっていただけだった。
木の前で何分間か立ち止まり周りを見て他の植物に害がないか見る
とまた木に向き返り頭を下げると歩きはじめた。

「あ！新しい花が咲いてる」
疲れていた顔がほころびそのあとはスキップで回って行った

森の入口まで来ると森に振り返った
「やっぱり森は癒されるわ、一日中居たいわ・・・」

日はそろそろ朝食の時間をさしておりスピカは慌てた
「急がなきゃ、朝食食べられないよ～・・・でもこれが一番体力使
って大変なのよね」

昔々今は亡き祖父に教えてもらった森を守るおまじない
森を統べるものとしての大切な・・・大切なおまじない
森番以外は知らない古から紡がれている言葉

スピカは心をこめて呟くと、森全体が一瞬だけひかり、そしていつ
もの雄大な静けさがもどっていた

「あー急がなきゃ！」

寝不足と疲労でフラフラになりながらスピカは残っている体力を使い走って城に戻った

自室に戻ると急いで手を洗いいつもの服に着替えて、食事の間急いだ

食事の間ではすでに全員が揃いスピカは神妙な面持ちで自分の席に座った

「スピカ殿寝坊か？」

「えぇすみません、この歳にもなって」

アラフスからは見えないのにスピカは先ほどだけでは取れなかった爪の間に残った土を隠すように手を握った。

「気をつけなさい」

テクミネが静かに諭す

スピカは本当の事が分かっているテクミネに静かに頷いた

和やかになり食事が運ばれてくるころアラフスが

「確かにな、そんな歳では少々恥ずかしいかもしれぬな、なぁルサス」

という一言で場の空気が凍った

ルサスは何も答えず、重い雰囲気のまま食事は始まった。

そして食事が終わる頃、一番早く食べ終わっていたスピカは
ごちそうさまでした、と手を合わせるとそそくさと部屋を出て行った。

残された人の雰囲気では皆何かを知っているようだが、ルサスは何も答えずアラフスはどうしたものかと一人悩んでいた

全員の食事が終わり各々の部屋に戻るとアラフスは早速ルサスにさっきの意味を聞いた

「なぜああなった？私は何かしてしまったか？」

（はぁこの馬鹿無知王子が・・・・）
心の中で溜息をつくと、気持を切り換えた
「年頃の姫様にはかわいそうだと思いますよ、なんせ思春期ですからね」

「そのようなものなのか・・・・姫は難しいな」

ルサスはアラフスの的外れな発言にため息をかみ殺し、仕事だと言って執務室へと向かった

のこされたアラフスはスピカが来るまでソファでまったりとしていた

そのころスピカは
森番のときに使った服を丁寧にしまい、これから出かけるための服をとり出していた

カノープスは小さな国のため城に使用人は必要以上にはおらず、スピカの部屋にはいろいろ大切なものがあるため使用人をつけないようにテクミネが配慮した

その結果スピカはかなり精神年齢などが高くなってしまった

外出用の服に着替えると部屋を出てアラフス達のいる客間に向った
(今日はどこを案内しようかしら・・・森・・森にしましょ！入れないけど外見だけなら大丈夫ただし今日は時間も少しだから)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

コンコン
「失礼しますよ」

「ルサス、お前はもう少し年上を敬え・・・で何だ？」

「家の馬鹿国王のことでね、さっきは悪かったね家の無知が」

「しょうがないさ森番は親族とか特別な奴にしか基本知らせられない、アラフス様が存じ上げなくても普通の事だ・・・口下手ではあったがな」

「で、それはいいとしてどこまでスピカを疲れさせるつもりだ？ネカル様はもう帰っていいるんだろう？」

「ああ、昨日レグルスが探し出してくれたさ・・・」

そこからテクミネは昨日の一部始終をはなした

「は・・・あ・・・ふぅ、大変ですね」

「あぁほんとに、スピカには今日で降りてもらうから、ネカルは今レグルスが説得しているし」

「じゃあ家の馬鹿も今日中に叩き直しますよ」

ルサスはじゃあとひらりとマントを翻してルサスは部屋から出て行った。

（・・・・・マント？なぜ・・）

太陽は真上に上がっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アラフス様本日は森に行きましょう！」

「森・・・あの森か？」

アラフスは前方かなり遠くに見える新緑を指差した

「もちろんですわ、今の時期は緑が綺麗で素晴らしいんですよ」

「そうか楽しみだな」

（森といってもあれは偽物だろ、なんでそんなのにわざわざ見せるんだ？俺を馬鹿にしているのか？確かにあのサイズは初めてみるが・・・）

アラフスは今朝の失敗を繰り返さぬため今日はできるだけ喋らないようにしていた

「お～いスピカ今日は何も買ってくれないのか？」

「ごめんなさいね、今仕事中なのよ」

「スピカも偉くなったもんだなあ」

「もお失礼よ、おじちゃん」

「スピカ殿は人気者だな」

「そうですかね？王族では一番城から出ていますが・・・・・」

森へ行く途中の市場、森へ行くためには必ずここを通らなくてはいけない、それゆえスピカは国の民とも仲が良い。

ちょうど一刻が過ぎ去ろうとしていた頃スピカ達は森の正面に辿りついた

入口は、あまり入口という感じではなく普通の木々がおい茂って小さなトンネルのようなものがあるだけだった。

「さあ着きましたよ、私の案内は本日までですので締めくくりにと思い森にいたしました」

森の前で両手を広げるスピカ、その姿は今日のドレスの色――緑とあっていて二つが溶け込みそうな感じだった

「あぁ心癒されるな、やはり偽物と分かっていてもこの貫禄さすがだ」

スピカのこめかみに血筋がはしった・・・・・
顔は笑顔のまま体勢も何とか保ち耐えた

「しかしなぜ森なのだ？この国はまだまだほかに名所が沢山あるだろうに」
アラフスは首をかしげつつさぞかし不思議そうに言った

（あぁこのお方は何も“森”の事もこの国のことも知らないんだ）
スピカはようやく理解するとなんとか気持ちを立て直して森の説明を始めた

「もの森は“偽物”でありますが何年も昔から今なお存在しているもので、今の季節“春”にはたくさんの花を咲かせ“夏”には葉がおおい茂りカノープスの「あぁもうよい、それも覚えさせられたのであろう？私のためにこんな無駄な事をさせてしまって悪いね森を一周したら帰ろうか？」」

スピカは今度の今度こそ立ち直れないと思いつつも体は上掲反射のように目に浮かべた涙をなんとか振り切り笑顔でうなずいていた

（私泣いてもいいかしら？いいわよね、今日の母様への報告さぼっても怒られないわよねだってだって・・・無知って最大の刃物だから）

森の周りを歩いている途中、終始うつむき加減のスピカをアラフスは心配に思っていた

「お腹が空いたのなら早く帰ろうか？」
やはりアラフスの言うことはどこか的外れだった
しかし確かに今はあとニ刻過ぎれば夕食の時間だ
「あ！すいません私とした事が、じゃあお言葉に甘えて・・・」
そう言うと二人は進路を城に向け歩いて行った

アラフスは素直な妹は可愛いなと純粋に感じていた
スピカはただただ悲しくて涙を堪えるために唇をかみしめていた、
そして何も考えられなかった

城に着く頃、鉄の味がする唇を気にする余裕はスピカにはあるはずもなかった

「スピカ殿今日までありがとうございました、これからも妹君としてよろしくお願いいたします」
「こちらこそよろしくお願いいたします」
顔を上げられなかったスピカは深くお辞儀をした

「そんなお辞儀はやめてくれないか？」
スピカはアラフスの言葉を聞く余裕は全くなくスカートをただひたすら握りしめていた、・・・・指先はすでに白かった
そんなスピカにアラフスはため息をひとつ落して自室へと戻って行

った

（はぁやっと終わった・・・）

心身ともに盛大に疲れ精神をすり減らしたスピカに歩く気力は残っておらず壁を伝い歩きして自室へと戻った

「あ～あスピカあんなに疲れちゃって・・・可哀そう、あの国王殺されたいのかな？スピカをあそこまで追いつめやがって」

スピカは自室に昨年作ってもらったお風呂に湯を張り夕食は食べないと決め服を脱ぎアロマオイルを1滴たらしずぅぅっとつかっていた

しかしアラフスの無知の刃は自分が気がつかない心の深い深いところをざっくりとやってくれたらしかった

温度が丁度よくなりスピカは久々に深い眠りについていた・・・風呂の中で

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「テクミネ様スピカ様よりご伝言でございます」

「なんだ？申してみろ」

「はっ！本日は夕食は必要ないとのことでまた本日の案内の報告はネカル様より受けてほしいとのことでございます」

「わかりました、もうよいですよ」

また仕えの者はまた足早に出て行った。

「はあぁ・・・・」

「ため息つくと幸せが逃げますよ、というかまずいですねスピカ」

「そうじゃな・・・・どうにかしたいが何も出来ぬ」

「先代の森番にかなりなついていましたからね、しかも森番は尋常じゃない精神力が必要だしな」

「今は一人で頑張らなくてはいけないが、支えがあればな」

「俺たちじゃだめだしな」

結局いつもと同じ話の堂々巡りだな、あと少しで夕食だから遅れないでくださいよ女王様

レグルスは悪戯に笑って部屋を出て行った

ひとまずはどうしようもないと判断したテクミネは残りの決裁を終わらせてしまい、夕食のため執務室を出て行った

一足先に出て行ったレグルスはすぐに食堂へは向かわずにアラフスやルサスのいる客間へ向かい二人を食事に呼びだして食事の間へ向かった

食事の間ではスピカを除いた全員が既に集まっておりいつもどうり和やかな雰囲気で表面上食事は始まった

無知という名の見えない刃（後書き）

次回やっと恋愛要素あり的な展開へ、スピカちゃんの恋は？

本当の試練～前篇～（前書き）

まだまだラブには程遠い感じです
このまま考えていくとかなり先になりそうです
今回のやつは前後編合わせてスピカがとにかく頑張り体を張ります
またルサスとの関係の変化にも注目です

本当の試練～前篇～

カチャカチャと食器の奏でる音しか響かない
誰一人として話をするものはいなかった。
（なんでこんな皆暗いんだ？スピカ殿も今日は食事はされないみたいだし、ルサスはなんかずっと不機嫌だし）
すべての原因が自分にあるとは気がつかないアラフスなのでした
食事もそこそこに済ませると皆そそくさと自分の仕事の持ち場へと戻って行った
「なぁルサスこのあとどうする？」
「どうもしませんよ・・・・・あ！国王にはお教えしておきたいカノープスについての秘話がございますので第３の客間へいらしてください」
ルサスはアラフスの耳元でささやいた
「なんでお前がこの城の事解りきってるようなこと言うんだよ？」
（実際なんでもわかるんだけどな・・・・）
心の中で呟くと
「先ほど教えていただいたんですよ」
ではのちほど・・・・・
そう言い残すとルサスは執務室の方へと急いだ
「何なんだまったく・・・・」

レグルスはよく分からないながらも、第3の客間に向った

――――コンコン

「誰だ？」

いつもの感じからは想定できないような厳しい声が飛んできた

「そうピリピリしないで下さいよ、私です」

「ルサスか何用だ？」

「第3の客間を使わせて頂こうと思いましてね」

「そんなに離れた場所・・・・・何する気だ？」

「なにちょっとした馬鹿国王の躾ですよ、ですから部屋全体に強力な結界を張りますんで気をつけて下さいと・・・・一言ね」

「あぁ分かった、ところでスピカはどうする？まだ寝ているらしいが今日の一件で森がかなり荒れてしまったと聞く、夜にでも抜け出して行くんじゃないか？」

話が長くなりそうだと悟った使いの者がルサスに椅子を差し出したそれに礼を言い深く腰掛けた

「抜け出さないように、結界でも張って欲しいのか？」

少し悲しそうに言い放った

「あの子が夜歩くのは危険だ、今は気持も不安定で力を正しい方向

に使えないかもしれない」

「女王様は親馬鹿だなぁ、でもその心配は今日限っては確かにありうるな」

さてどうしたのもかとルサスは腕を組みスピカの部屋に張る結界を考えていた

「内側からは絶対に出られないような結界を頼む」

「今日のスピカは分からないから何があっても怒るなよ？保険のために二重結界にしておくからな」

――――――誰も近づけるなよ

それだけ残してルサスは第三の客室へ向かった

「ふぅ・・・・」

テクミネはため息をつくと目を少しの間だけとじていた

まわりにいた仕えの者はテクミネへの信頼がよりいっそう深まった

ルサスはスピカの部屋の前にいた

中にスピカの存在を確認すると、結界を張り自分は第三の客間に向った

スピカの部屋はルサスには見えるが他の者にはただの壁になっていた

第三の客間の前に行くとまた呪文を唱え先ほどよりも単純な結界を張った

そして自分も中に入りまた内側からレグルスに気がつかれないように結界を張った

この厳重な結界は遠回しに厳重機密を話し他言無用だと言う事を意味していた

――――――テクミネ、お前はこの結界の意味に気がついているか？ルサスは一人でほくそ笑んでいた

「おいルサスこの部屋少し暗くないか？」

「平気ですよ、それよりも話があるので座ってください」

「何なんだ？急に」

「この国と手を結ぶこと、婚姻関係を持つことについての心構え的な事をお教えいたしましょう」

「なんだ？」

「まず、世界にはひとつだけ本当の“森”が存在するのはご存知ですよね？」

「あぁ存在するだけならな」

「じゃあここからが本題です、世界にはその真の“森”を真似て作られたここでは林にしておきましょうか、林がいくつも存在しています、しかしこのカノープスに存在するのは世界で唯一の最後の“森”なんですよ」

ここでレグルスはこの国の森の大きさに納得がいった
「しかし、そのような森は厳重に結界が張ってあって、誰も入れないんじゃぁ・・・」

「まぁそこは私の専門分野ですから、お茶の子さいさいですよ。でもう一つ重要なのは、そんな世界に唯一つしかない“森”にはもちろん森番と呼ばれる人が存在します、先代の森番はさぞかし優秀な方だったと聞いています」

「過去形ってことは・・・・」

「その先代第３８代森番リアファ様は老衰のため昨年お亡くなりになられました・・・と表向きにはされています、そして今代３９番目の森番はスピカです。」

レグルスは驚愕の顔をしてそのまま固まってしまった・・・・
しかしだんだんと今日のスピカの行動の意味が取れてきたのか、逆に目が不安そうにキョロキョロと動きまた泣きそうな表情をし始めた

「私はあなたのその呑み込みの早さが好きですよ」
ルサスはにっこりとほほ笑んだ

「今褒められても、俺はスピカ殿に・・・・本当に悪い事を・・・」

「そう思われるのなら、最後までノンストップでいきますので聞いていてください、スピカはリアファ様にかなり可愛がられておりました。“森”の守りは代々その代の方がお亡くなりになる時、死と引き換えに次代の“森”の守りができますが、リアファ様は魔術の使い手だったので生きながらにして“森”の守りの強化を毎日行っ

ていました。
その時まだ幼かったスピカはリアファ様には自分の次の代の森番だとお分かりになられておりリアファ様の仕事中でもスピカを常に同行させておりました、そのおかげかスピカも魔術には長けました。
そして昨年リアファ様はその稀な存在を他国に利用されそうになり“森”で自殺なされたのですご自分の愛する地で、その時リアファ様はこれ以上森番が続かないように自分ができる最大限の魔術で“森”を保護しましたが、今年その魔術をスピカがといて第３９代森番になりました。」

「そうか、そうだったのか・・・・・私はなんて悪い事を、しかしなぜお前がそこまで知っているんだ？俺よりも年下なのに・・・・」

「あぁ私はカノープス・・・・というか魔術を使えるものはカノープスでしか生きられなく・・というか掟のようなもので私は俗に言う魔女や魔法使い・・・魔族の長でありリアファ様とは師弟関係でしたから」
私たちのようなものたちは魔族と呼ばれ年に１度は帰ることが義務付けられているんですよ

とルサスは事もなさげに答えた

「まったくお前は謎だらけな奴だな」

「そんなのを拾ったのはあなたでしょ？」

「まぁそうだがな・・・・・、で話はここまでか？」

「はい一通りは、ここまでご存知であられれば大丈夫でしょう」

「さすが俺の仕えの者だな」

「光栄です」

「それよりもこの結界をといてくれないか、薄気味悪くてしょうがない」
レグルスは体をぶるっと震わせた

「さすが私の主、少しはおわかりになるようですね私の魔術が・・・・残念」
ルサスは少しおどけた感じで言い、立ち上がるとドアを・・・・開けた
一瞬で部屋の空気や雰囲気が変わり、いつも通りの客間に戻っていた。
「ではレグルス様私はもう一仕事ありますので、お先に失礼いたします。」

「あぁ話を聞かせてくれてありがとう、先に客間に戻っているよ」
レグルスはカノープスにきて一番晴々しい顔をしていた

(話して正解だったな・・・・)
ルサスはもう隠すことはないと、魔族長の黒に金の刺繍が入った長いマントを着てある部屋へと向かっていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

スピカは海底から浮上するようにゆっくりと意識を取り戻した
グゥ～とお腹が鳴るも気にとめない

今意識の中心にあるのはこの部屋に張られた結界の感じ

（この結界リアファが死んじゃった時と同じ感じ、しかもあの時よりもかなり強力…）

スピカはお風呂から出ると用意されていた寝具ではなく、森の色をしたワンピースを着てドアの前に立った。

（この結界完璧・・・・隙がないわ、でもこの結界いやな感じがする。リアファと同じ結界・・・）

結界に手を触れて確かめた

結界の反発で手が痛めつけられようが気にしないといった様子だ

スピカは知らず知らずのうちに涙を流していた

そして全神経を集中させて結界の綻びを見つけると、力技で破り張った人にばれぬようまた結界を張り直した

しかしスピカは昼間の精神状態と体力・先ほどのなれぬ結界と結界破りで昏睡寸前だった

そんなスピカを突き動かしていたのはほかならぬリアファへの気持ちだった

スピカは人っ子一人いない町中を全力で走りぬけた

――――――――――――――やられたな

タッチの差でスピカの部屋についたルサスは思った

自分の張った結界は完璧だったはずなのにものの見事にスピカに破

られてしまった

（誰かが何かしたかな？ぶつかりでもしたか？）

自分の結界を触り入念に調べて行くと今のスピカの状態が手に取るようにわかった

（あいつ結界を力技で・・・・しかもそのあとにカモフラージュ用とは、そのせいで昏睡寸前・・・・やめてくれよ）

すでにスピカの行く先まで分かっているルサスはスピカと同じく森へと急いだ

森の中に入ると真っ暗なのに何故が歩ける・・・・

これも森番の力？・・・・

真っ暗闇の中を裸足のスピカはある場所へと向かって歩いていた

――――――――リアファの死んだ場所へ

暗闇は容赦なくスピカの心の弱いところに入って行く

《どうせ偽物だろ》《覚えさせられ・・・・・》

その度に倒れそうになる体をなんとか支えながらやっと場所についた

がそこは荒れ果てていて、毎日スピカがお供えしている花すらなく
そこは酷く荒らされていた
酷くショックを受けたスピカはその場でついに倒れてしまった

森に入ると何やら森が落ち着かない雰囲気だった

（いやな予感がするな・・・俺の結界から推測するといった場所は
リアファ様の・・・）
ルサスは本能的に足を速めていた

森は真っ暗であるが夜目の利くルサスには何の問題もなかった
若いころに比べ闇に自らを囚われる事もなくなり安心して様々な場
所を歩けるようになった

（だがスピカはまだ若い闇に囚われると厄介だからな・・・・）
少し自分も闇が入ってきたなと感じたルサスは気を集中させて先を
急いだ

あっ！！！！
リアファの死に場所にたどり着くとスピカが倒れていた
顔は顔面蒼白で体も冷たくなりかけていた

ルサスは自分の来ていた魔族長の黒に金の刺繍が入ったマントでス
ピカを包み込み、死に場の映像を記憶させると足早に森の入口へと

向かった

スピカを連れていることで闇が先ほどよりも多く自分に襲いかかってきてルサスでも危なかった

やっとの思いで入口につくと

「魔族長ルサス・イザカルの名において本日は第３９代森番スピカの代行をいたす」

そう言い放つと呪文を呟き、森はいつもの静寂さを取り戻した

しかし相変わらずスピカの容体は酷く急いで城へと戻った

本当の試練～前篇～（後書き）

後編はルサスとの関係に・・・ついに変化が！！
アラフスとネカルのお話は何処へ？って感じでスピカとルサス二人のワールドが展開される予定です

本当の試練～後編～（前書き）

正直あんまり試練になってないような・・・・
今回はちょっとした身辺整理的な感じでお読みいただけると

本当の試練～後編～

「おかえりなさいま・・・・・・スピカ様！！！」

城の門を通り過ぎる時門番が挨拶してきた

（スピカ、お前はこの国でかなり親しんでいるみたいだな・・・）

「あぁスピカは大丈夫だよ気にしないで」

「はっ！！よろしくお願いいたします」

二人の門番はビシッと敬礼しルサスに頭を下げた

コツコツコツコツ

「・・・・・・おい、それは何だ？」

怒りを前面に出したテクミネがルサスの前に立って腕組をしていた

「森でリアファ様の死に場で倒れてたよ、多分俺の結界に驚いたんだろうね」

ルサスはスピカを抱いたまま歩きだした

「どういうことだ？」

テクミネもルサスについて歩きながら話し始めた

「俺が魔族長でリアファ様が師匠だってことは知ってるよな？」

「もちろんだ、でそれとどんな関係が？」

「俺の張る結界はリアファ様から教えて頂いたんだ」

「なるほどね、それでスピカが勘違いしてリアファが生きていたと思ってしまったのか・・・・あの精神状態だったらしょうがないな」

「ほんとに飲み込み速いな、さすが女王様・・・・じゃぁこの後するべきことは分るよな？」

「ああ、この時間だ誰も行かないだろうよ・・・でお前は一人で大丈夫か？」

「この歳での魔族長の実力と容姿をなめるなよ？」

ルサスは不敵に笑って見せた

「容姿は関係ないだろ、お前２３歳何だから一般的に見て格好よくて当たり前だ！」

「認めてくれるんだ、ありがとよ女王様」

ちょうどスピカの部屋の前についた二人は別れてルサスは部屋へと入って行った

ルサスはスピカをベットに預けると、ドアへ向かいより強力な三十結界を部屋全体に施してスピカのベット全体にはスピカの回復が早まる様にと自分の体力を半分以上その結界に入れて張った。

さすがに体力の限界を感じ始めたルサスは近くにあった椅子に体を投げ出すように腰掛けそのまま眠りについてしまった

体力が回復しやすいように作られた特別な魔族長を表す長いマントはスピカに掛けられたままだった

朝日が部屋に差し込む
部屋全体が朝日に包まれる頃、スピカは目が覚めた

（なぜ自分の部屋で寝ているのだろうか・・・私はリアファの死に場で・・・）
様々な事が考えられるも、自分の体は重くて持ち上がらす視線を彷徨わせると自分の上には見かけない高級そうなマントが掛けられていた
「なに・・・・これ」
マントを持ちあげてみるも自分には全く見覚えのないものだった
（まったく誰のだろう・・・）

スピカは混乱の渦の中にいた

また眠りについてしまい数刻が過ぎていた
さほどよりも幾分体が軽くなったスピカはベットの上で体を起こせるまでになった

（・・・・ベットに結界が張られている！！）
自分のベットから出れないことに気がついたスピカはまたこの結界の気に気がついた

（これもリアファと同じ！）
ベットの上に立ち上がった時マントが足もとに落ちた
目を部屋全体に回すとスピカの目に映ったのは椅子に投げ出すように身を投げ出し寝ているルサスだった

（・・・ルサス？）

そのままスピカはかたまり動けなくなった

――――ぅうん・・・

（もうこんな時間か・・・・やっぱり無理は禁物かな）

ルサスは呑気な事を考えながら両腕を伸ばし体を伸ばした

そして目を開きスピカのベットに目を向けると

――――スピカとバッチリ目があった

「・・・・・・お目覚めのようで」

「ルサス、質問していいか？」

「まぁなんでも受けましょう」

ルサスは苦笑いしながら答えた

「これはあなたの結界ですか？リアファと瓜二つなんですが」

「まぁリアファ様は私の師匠ですからね・・・」

「！！結界って言うのは代々森番しか使えない・・・・ってリアファが・・」

そこでスピカは泣き出してしまった

「結界は・・・魔族の者なら誰でも使える、元に俺だってスピカのベットとこの部屋に結界を張った」

「そうですね、何もしないからこの結界だけは外してください」

スピカは布団を叩いた

「・・・しょうがないなぁ」

ルサスは手をたたくと結界が一瞬にして解けた

「ルサス様知っている事を話してください」

スピカはまだ涙の残る顔の決意に満ちた目でルサスを見た

「いいねぇ若者のその目大好きだよ、じゃあ話そう」

ルサスはスピカのベットに落ちている魔族長のマントを取り上げるとそれを豪快に着て椅子に座りなおした。

「まず俺はセントレス国のアラフス国王の仕えは副職で本職はこのマントにあるように世界の魔族を統べるもの・・・・魔族長だよ。この国の前代の森番リアファ様とは師弟の関係で昔お世話になっていたんだ、力があった俺はリアファ様に魔族としての力の使い方を学んだ、だから俺の結界はリアファ様と似ているか同じなんだ。だからというかなんというか魔術を使えるスピカは俺たちの仲間になる」

「ってことは私は何かしなくてはいけないんですか？」

「言うと思った・・・だいたい魔族は森の血筋が混じっている者しかいない故に魔族たちは本当に強力な力の持ち主以外はカノープス以外では暮らせないんだ。

スピカは俺がちょくちょく森を通って力を見ているがまだまだだからカノープス以外では暮らせないし。仲間に会うにはもう少し力を強くしないと、他の奴の力にあてられてダメージ受けるから今は大丈夫！」

「仲間というか魔族は世界で今どれくらいいるんですか？」
「まぁざっと４０人くらいかな・・・・みんな大人でね」
ちょっとだけ残念そうに
「そうなんですか・・・・で私はこれからどうすれば・・？」
「う～んスピカは森番があるからねぇ・・・ここに居て力を溜めてね！しばらくしたらまた会いに来るから」
そう言うとルサスはマントを翻し部屋全体の結界を解いて部屋を出て行った。
部屋を出て行くときルサスの体にはボロボロのマントが掛かっていた
「あれも魔法なのかしら？」
残されたスピカはベットの上にいた

「・・・・ルサス様、これからスピカはいかがなさいますか？」
「よう経過観察で、彼らにもそう伝えておいてくれ・・・あぁあと手出し無用で！！」
「かしこまりました」
「俺はこれから一度セントレスに向う、しばらくしたら戻るから」

「かしこまりました」

「あとマント・・・・どうしようかな」

「お持ちになっててくださいよ！長ですよね？貴方様は」

「わかったよ、じゃあまたあとで」

全身黒ずくめのいかにな男は闇へと消えていった

本当の試練～後編～（後書き）

いかがだったでしょうか？
私的には身辺整理的な感じです
次回は・・・・とにかくルサスの独白の短編を挟んで行こうかなと
今思いつきました
行き当たりばったりです
頑張ります
終わりが見えません

新たな一歩（前書き）

ルサスの小話は考えていたけどこっちが先になりました。
本当に恋愛要素皆無です
スピカはこれから強くなります、もろファンタジーです
恋愛要素はあと４話くらい先かな？と言いつつもう少し先になるかもしれません

あと更新速度がガックーンと落ちましたが新生活？と言っても世の中の仕事始めみたいなものが始まったからです、たぶんこのペース。
今日から４連休なので少しは進むと思います

ではどうぞ、新たなる旅立ちの

新たな一歩

ルサスが出て行った部屋で一人残ったスピカは一人状況整理をしていた

「いろいろな事を押し付けすぎよ！！ルサス様は」

布団やクッションをばしばし叩きながら大声をだしていた

部屋の外に待機していた仕えの者たちは怪訝な顔をしていた

「よしっ！まず力をためるために森に行くか！・・・・あ！ルサスにはなんか強くなれる練習相手を探してもらおうかな」

「そうと決まればすぐに行動に移すわ！！」

ベットから飛び降りて服を整えるとスピカは部屋を飛び出していった

廊下にバタバタとスピカの走る音が響いていた

（あの子がスピカ？まだ子供ねぇ）

（まぁそう言わずにね？大丈夫素質はかなりあるよ頑張って伸ばしてね期待してるから）

（えぇ！？私がお守、私もそれなりの重役なんだけど）

（今暇でしょー？どうしてもいいからよろしくね）

バンッ！！
執務室のドアが勢いよく空き、スピカが駆け込んできた
「・・・・スピカ、もう少し落ち着きなさいそれともう体長はよろしいのか？」
突然とドアが開いたことに驚きまたスピカがそこに居た事にもテクミネは驚いた
「ハアハァハア・・・・あ・・・・すいません、体調はゆっくり寝たおかげかかなり絶好調です」
息をとぎれとぎれにさせながらスピカは答えた
「それは何よりです、で何用ですか？」
手に持っていた書類を机に置き両目がスピカを見据えた
「さきほどルサス様にお会いして話を聞きました、そこでお願いがありまして・・」
そこで一旦言葉を切り深呼吸をするとスピカは再び喋りはじめた
「私、強くなりたいです、森番としても魔族としても私はまだまだ未熟過ぎて・・、ですから誰かこの国におられる魔族の方で私のお守をしてくださる方をご紹介していただけないでしょうか？」
「私に？なぜ相手が違うだろ？なぜルサスに頼まない？」
テクミネはスピカの瞳を見据えた
「・・・・・そうでしたね、わかりました自分で探してみます」

そう言うとスピカは俯きがちに部屋を出て行った。

――――パタン――――

「これでよかったのかい？ル・サ・ス・様？」

「イヤミったらしいなぁ女王様」
ルサスはテクミネの椅子の後ろに背をもたれさせた

「あれで本当にみつかるのか？？お守やくが」
ちょっと不安そうに尋ねた

「あぁ俺の部下を一人つけさせる予定だ、でもスピカが一人で行くなら自然と合わせる方向で行こうかな？」
愉快そうにルサスは笑っていた

「いくら家の国が安全でもスピカ一人じゃ危なくないか？」

「テクミネ様はいつまでも親馬鹿だなぁ」
ふざけた感じで言ったルサスはいきなり真面目な顔になり

「テクミネ、スピカは早く独り立ちさせないと駄目だ森番としても人としても魔族としても、何かあったら絶対に俺が守るそれだけは誓う、だから今は見ててくれ」
それだけ言い放つとルサスは椅子の後ろから姿をけした

そのごテクミネはスピカに事情を話し、国の事一切何もせず力を伸ばすことだけに専念することを言い、スピカはうれしそうに返事をして昼の世界へと歩きだしていった

「可愛いこには旅をさせよってか・・・・しょうがない・・・これはあいつらに回そう」
スピカの仕事を兄二人に回して、テクミネは自分の仕事に戻った。

新たな一歩（後書き）

短いですがこれでひと段落、スピカの身辺整理？みたいなー。
でも新キャラこれからたくさん出ます
スピカはこれからたくさん怪我してもらいないなー、Ｓとかじゃなくてそっちの方が恋愛に絡め安いからってだけ
まぁ今回は短めですみません
次回は早いです！
ここで断言しておきます
お読みいただきありがとうございまし

出かける準備

「私、一人暮らしがしたいです！」

スピカは王の部屋で宣言した

「それはまたどうして？」

静かにしかししっかりとアクベラスは聞いた

「父上様、私は魔族としても森番としても強くなりたいです、そこで私が考えたのはこの城を一旦離れることです」

スピカは自分が一気に話してしまわぬように一言一言噛みしめるようにして話した

「この城はこの国を守る者が住む城です、ゆえに仕えの者がいて何不自由なく暮らしていくことができます、私は怠けられるからという理由とかではなくてこの城がこの生活が好きです、しかし好きな場所にずっといては自分が変われないと思いました・・・・強くなることは自分の身の回りの事が出来なくては、そして自立した生活が大前提だと私は考えました、ですから私が強くなれるまでこの国の郊外で一人で暮させては頂けないでしょうか？」

ふぅと息を付く

「で、強くなるまでとはいつまでかな？」

アクベラスは娘の成長を感じつつふんわりとスピカを包むように言葉を発した

「それは・・・・よくわかりません、修行してくださる相手もまだ見つかってませんし、町に出て探す予定ですが」

とたんに言葉を濁し始めたスピカ

「では強くなったかを見極めるのはこちらで舞台を用意しましょう、月一で帰ってきてこちらが用意した魔族と闘って見極めましょう」ルサスから大方の話を国王夫妻は聞いていたので話はすんなりと進んでいった

「ではスピカ、テクミネにばれると話が面倒になるので今すぐに必要最低限の荷物を持って誰にもばれずにここを出ていきなさい」いつになくはきはきとした口調でアクベラスは言い放った

言葉の裏には見つかるくらいなら強くは成れないよ

スピカにはそう聞こえた、娘が自分の言いたい事をきちんと理解してくれた事に満足したアクベラスは自分の机から透明なブルーの色の玉がついたネックレスをスピカに渡した

「これを常につけていなさい、私からの餞別だスピカ頑張ってきなさい」

「ありがとうございます、行ってまいります」

受け取ったネックレスを首にかけるとスピカは元気よく返事をし部屋を後にした

（これでまた一人さぞかし立派な魔族が仲間ができるわけだ・・・魔族長殿？）

（そんなこと言わないでくださいよ、あなただって通った道でしょ？）

（俺は男だから、スピカは女だしまぁ俺のネックレスを渡したから大丈夫だろうけど）

（親馬鹿ですか？アクベラス様、気持悪いですよまぁ貴方様のネックレスをもっていれば安心ですけどね）

（そういえば、いつ合流させるの？今日出て行ったけど？）

（アクベラス様がいきなり言いだすからびっくりしましたよ、そっちの方は大丈夫です）

（さすが魔族長だ関心関心、まだお若いのに頼りがいのある・・・・・）

（推薦したくせに、じゃあ私はここで失礼しますよ）

意識を覚醒させるようにゆっくりと目を開けた

目の前には、いつもの変わらぬ風景テクミネの部屋はここからかなり離れている

（いつからか、こんなに離れてしまったのは）

そう考え始めると、いつも自分をコントロールできなくなる部屋の空気が変わった何℃か下がり今の服では寒く感じる、部屋に置いてある家具が揺れはじめ本棚が倒れた

その音で理性が切れそうで切れない状態までになってしまった

（この部屋には自分で結界を張ってあるから安心には安心なんだが、ルサスに連絡・・・・）

ルサスに連絡を入れている途中で理性が切れてしまったベットは壊

れ窓は割れ部屋全体が不法地帯と化した状態で意識が途絶えた

――――――――ル・・・・・・・・・・サ・・・・・・・・

（誰だ？）

意識の糸をたどればアクベラスからだった

（さっきまで話してたのに・・）

魔族には連絡手段として相手に意識を飛ばすことを覚えさせる事務連絡から自分の危機の時まで幅広い意味で活用できるように

（ってことは緊急事態か・・・・・・）

まだ城の中にいたルサスは急いでアクベラスの部屋へと向かった

ドアを開け放つと部屋は無法地帯で、自分の机の前で倒れているアクベラスを抱き起しルサスは一瞬のうちに部屋を元通りにしてベットにアクベラスを寝かせた

アクベラスの額に手を置き顔に残る涙の跡を消してルサスは部屋を後にした、これがルサスが魔族長に選ばれる理由だった

（まだ悩んでたんだな・・・・）

――――――――――――――――――――――――

部屋での荷物整理が終わったスピカは荷物を抱えて城の塀の前に居た

目の前に広がるのは鉄格子の柵

（さぁ～てどうしたものかしら、これが第一関門ね）

常にポジティブなスピカは荷物を置いて考えた

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！）

何かひらめいたスピカは眼を閉じて意識を集中させたそして必要最低限の場所にだけ結界を張り極度に硬度を高めて形を形成して自分はその上を歩いて城を後にした

その光景を上から眺めていたルサスはスピカの成長に満足そうに微笑んでいた

「さてこちらの仕事をかたずけるかな？」

師匠の登場（前書き）

意外な方向に話が飛躍していきます。
今読んでいる本の雰囲気も交じってきちゃった・・・
行きつく場所は同じなのですが・・・ね
それまでのスピカの経験値がかなり変わってきています・・・

あぁ～いろいろやりたくなってきちゃった
では今回は新しいステージへ！！

師匠の登場

外は日が落ちて真っ暗闇、ちらほら見えるのは民家の明かりだけ

・・・今、押し掛けるのは迷惑よね

スピカは今日泊まる場所を悩んでいた

「う～ん、ぅ～ん。・・・・しょうがないか」

やっと決断ができたのか人がいない市場の中をウロウロするのをやめてある方向に向かって歩きはじめた

（・・・・・・・・やっぱり落ち着くわ）

森の一角にきたスピカは荷物から適当に暖かそうなものを出して木に登り始めた

木の上で安定できそうな場所を見つけると身体に持っている物をかけて眠りについた

《あらあらあんなところで寝ちゃって危なかったしいったらありゃしない》

《早く、合流しろよ》

《あせらないでくださいよ》

《ほらぁ、まあ今日中には頑張りますよ》

「う～ん、体・・・痛っ！！」

木から落ちそうになりながらも何とか耐えて、首を左右に振った

「いった～い、今日はまず家さがしね」
今日の予定を大まかに決めたら、木から飛び降りて荷物に保護の呪文をかけてスピカは今日も走って町に向った

「おじさん、こんにちは！今日は家を探して来たんだけど？」
朝早くからスピカは町一番の物件屋に訪れた

「どうしたいきなり、スピカちゃんに合う物件なんてな・・・」
いきなり現れたスピカにうれしそうな顔をして店の店主のおじさんは笑いかけたが聞いた内容に心底困惑した顔をした
（スピカちゃんのね～・・・・王族にアパートって悪いよな・・・）
そんな試案をしているさなかスピカは期待に心を躍らせおじさんをウキウキとした目で眺めていた

――――ガチャ
「失礼するぞ、店主。森の近くにある戸建てを一つ頂こうか」
黒く長いマントに包まれた威圧感のある男がいきなり入ってきたウキウキとカウンターに身を乗り出していたスピカは、いきなり入ってきた男に驚いて固まった
また思案中だったおじさんは気にも留めずに
「一括でいいのかい？お兄さん？」
「大丈夫だ、金はまたあとで・・・いや今払う」
そう言うと男は懐から大金を出してカウンターに置いた
（これが年の功というやつか・・・）

スピカは関係ない事を考えながら男を観察していた
（微妙―な銀髪・・・、この声も渋くてカッコいい・・・）
男は店主との話を終えて最後にカウンターに自分の名刺らしきものを置くとスピカの腕を引いて店の外へと出て行った。
店主は一瞬止めようとしたが、手の中にある紙を見ると逆にスピカに向って手を振りにこやかに送り出した
「ちょっと！おじさん～にこやかに手なんか振らないでよ」
スピカは突然のことに驚きつつも手を振りほどこうとするが男の腕力にかなわずそのまましぶしぶ歩いて行った
店主の手の中の紙にはこう記してあった
魔族長ルサス・イザカルの名においてカノープス国下では見習魔族スピカと魔族攻撃部隊長カミル・マエは行動の自由が約束される
彼らの行動でかかる費用等は我ルサスに請求すべし
（意外と現実的なんだな・・・魔族も）
魔族の事は知ってはいるがどういう存在なのかは明確にはされておらず不明な点が多かった
店主は興味半分にそれを眺めていると目の前に男が現れた
＜こちらに先ほど男と少女が訪れたかな？＞
「訪れましだがどちら様ですかな？」
先ほどの男と同じようなマントを着た女が目の前に現れた
＜ルサス様に言われてきたものです、先ほど出した金額では足りな

いと思いお支払いに参上いたしました>
女は懐から札束をだして瞬時に消えた
お金だけ残った店の中を見渡しながら、店主は今さっきの事がうまく飲み込めてはいなかった

《やってきてくれた？俺忙しいから》

《大丈夫です、それよりもなぜいきなり攻撃部隊長などに行かせたのですか？》

《そりゃー早くスピカには城に戻ってもらいたいからね》

《私はあなたが一番嫌いです》

《ありがとう、今日はもういいよお休み》

《ありがとうございました》

手をひかれたまま歩き続けていたスピカは道の曲がり角を曲がった、目の前には立派な家が一つ
男はまだ無言のまま呼び鈴も押さずに家にずかずかと入りようやくスピカの腕を放した

「もう！何なんですか！」
うまく状況が飲み込めないスピカを鼻の先であしらい男は優雅に銀の装飾がついたマントを脱いだ

マントの下には鍛え上げられた肉体美があった、着ている服を押し上げるような著しい筋肉にスピカは男の年齢が分からなくなった

「俺が誰だか、どこから来たかもわからぬのか？宝の持ち腐れも甚だしいな」

男は呆れたように呟き、指を鳴らすと目の前の机の上に突然とスピカの荷物が現れた

「これはおまえの荷物で正しいな？」

否定も肯定も許さないような口調にスピカはその場から動けなくなった

「あぁ悪いな俺の部隊にはそんな奴はいなくてな」

男が張っていた気を緩めるとスピカは体が軽くなるのを感じた

「あ・・・あの、それ私が朝森に隠してきた・・・・」

スピカはしどろもどろになりながらも話した

「隠した？置いてきたの、間違いではないのか？」

「いえ、隠してきました・・・・結界で」

「ははっ！ただ保護してるだけかと思ったよ、丸見えでね・・・しかしまぁそこがお前の力の限界だろ」

男は一人納得しているようでふむふむと頷いていた

「聞きたい事があるんですが、よろしいですか？」

相手の様子を窺うように聞いた

「なんだ？」

「貴方様はなんとおっしゃるのでしょうか？魔族ですか？ルサス様の仲間ですか？」
聞きたい事はそれだけか？と男が目線で言うがスピカは頷いた

「一回しか言わないからなよーく聞いておけよ。
我は魔族・魔族攻撃部隊長ミカエル・マエだルサスは俺達魔族の長、今回お前に会ったのは偶然とかバカバカしいものではなくてルサスに命令させたからだ」
ミカエルは組んだ足を優雅に組み替えつつ話した

「俺がルサスから頼まれたのはお前のレベル向上のみ、私生活での事は自身でやると聞いている、でなぜこの家を購入したかは日常生活のありとあらゆる場面で魔法は使えるその訓練のためだ、期間は本日より3か月まぁ俺が見てやるからそれよりはかなり短縮できるだろうさ」
ニヤリを笑いながらスピカを見た

「わかりました、よろしくお願いいたします。月に一度決闘のため城へ戻る様に言われてるのですが・・」

「それは俺の提案だからな、たぶん大丈夫さ」

「じゃあ今日は身近なスキルをすべて叩きこんでから休憩にする、着替えてこい」
そう言うとマントをふたたび羽織りミカエルは地下に続く階段へと消えていった

「不思議な人・・・・あの人が私の師匠になるのか・・・」
不安と期待が入り混じった声を出しながらスピカは手持ちの荷物か

ら服を取り出して着替えた

スピカの形（前書き）

連日投稿、これでストックが０に！！
今これと並行して新シリーズ（現代）のを書いています
更新には何の影響もありませんが宣伝がてらにひとつよろしくお願いします
今回はスピカの力があらわに！
関係ないけど頭の中の構造で行くとかなり長いお話になる予定です

スピカの形

（・・・確かここら辺）
ミカエルが消えた床を足で床を叩いていると・・・・

「うるせぇぞ、スピカ！俺が消えた場所くらい魔力で探せ！！」
床の下から声がしてきた、がスピカにはどこにミカエルが居るのか分からかった

（もぉ～ミカエル様どこよ～）
探し始めて2時間、持っている魔力を試行錯誤して探しているが掴めるようでつかめないミカエルの居場所に半泣きだった

———さらに2時間
（やっと見つけた！）
スピカは床の一部を足で壊すと下ではミカエルがマントを布団代りにして眠っていた

「ミカエル様！見つけましたよ」
スピカは満面の笑みで笑っていた

「お前遅すぎんだよ、眠っちまったしもう外真っ暗じゃねいか！一通り終わるまで今日は眠らねぇぞ！」
（・・・かなり疲労してんな、まぁそれくらいが丁度いいか）
目を細めてスピカを観察しながらミカエルは言った

「あと様付けはやめろ、俺らの部隊は実力主義だ。さ修行だ修行！・・・あと見つけにくかったのはお前の能力が低いんじゃなくて俺が自分に結界を張ってたからだよ」

ミカエルは楽しそうに笑いながら部屋の中央に歩いて行った
（・・・っしゃぁ！）
スピカは小さくガッツポーズをしてミカエルのあとを付いて行った

部屋の中央につくとミカエルはふっと息を吐くとスピカが感じた事がないほどの強力な結界が張られていた
「さて・・・まず魔族の基本能力からやって行こうか・・・って言っても魔族は生活していく中でいろいろ覚えるのが普通なんだが」
あごの髭を撫でながら思案するように言ったミカエルは

「よし、まず情報の連絡手段として俺らが日常的に使ってる基本中の基本から行くぜ、細かい使い方は自分で覚えろじゃあ俺にこれからの予定を念として送れ、届いたら俺が返事するからそれを口に出して言え」
それだけ言うとミカエルはどこからともなく椅子を出現させてそこにドカッと座った

スピカはこれからの予定を考えてから次にどうミカエルに伝えようか考え始めた
（どうしよう、テレパシー的なものなんて見たことないし・・・・・
え！？魔力を使って・・・ってう～ん）

（え～わ・か・ん・な・い～伝える伝える伝える）
スピカが悶々と立ったまま考え続けていた

（・・・意外と難しいんだよな、魔力の扱いの中でこれが一番特殊だから）
片目を薄めに開けてミカエルはスピカを観察していた

（身長は普通、容姿はまぁ可愛いな、魔力は結構ある・・・が俺を見つけるのにかなり魔力を消費してるな・・・・）
そんな事を考えているミカエルにスピカの伝えたい事がうっすらながらも伝わってきた

（あいつを見るにはまだ悩んでるな・・・じゃあこれは無意識か・・・怖ぇ）
「お～いまだかい？スピカ」
からかい口調で悩み続けるスピカに声をかけた

「もう少しです、イメージができかけてるんで待っててください！」

「もう待ち始めて何時間だったかな・・・」

「まだ2時間です！大丈夫ですからもうちょっと待っててください！」

「そうかい」
目を閉じて腕を組み先ほどよりもゆっくりしはじめた

（よしっ！さっきみたいに魔力を糸見たいなイメージにして頭の中のミカエルに絡める・・・・・今日の予定は修行修行）

スピカはそんな事を数回行っていた

（・・・・・・！！来たな）
スピカからの魔力を受け取ったミカエルはスピカに返信した、ごくごく弱い魔力で

（・・・？？さっきから何か来る感じはするんだけど、なんだろう？）
スピカはミカエルの返信だとは気がつかずに困っていた
（これじゃあ届いてないかな？）
ミカエルはスピカの様子を見ながらも魔力を送り続けた
魔力を送り続けて数十分
（・・・あぁめんどくせぇ、送るよりも受け取る方がはるかに簡単じゃねぇかよ！）
若干イライラしはじめたミカエルはスピカに魔力を送りつつも部屋の中央にあった明かりを壊した
「え！？なに？」
突然と明かりが消えてびっくりしたスピカはうろたえた
「お前はここで一人だ、何も考えるな魔力だけを感じろ」
そう言われた瞬間スピカは頭の中にミカエルの声が響いてきた
《次の修行は魔力を形にする、自分の思う魔力を形にしろ》
「次の修行は魔力を形にする、始めます」
《わかりました》
スピカからの返信に満足したミカエルは壊した明かりを元に戻してスピカの魔力の形を楽しみにしていた
目の前ではスピカが全神経を集中させて残る全ての力を使い自分の魔力を体の外に出した

と、突然スピカの体のまわりから水があふれ出てきてミカエルはとっさに体のまわりに強固な結界を張った・・・・がその水の威力と量にミカエルが押し負け結界を解いてしまった

水に飲み込まれながらも着ていたマントを脱ぎスピカ全体を魔力で縛りあげ気絶させた

とたんに水は消え床にはぐったりしたスピカが倒れておりミカエルは脱いだマントを着てスピカの額に手を当て様子を確認すると抱きあげて2階にあるベッドにそっと寝かした

《おい、ルサスどういう意味だ？》

《どうしたのミカエル？》

《とぼけるなスピカの魔力が強力だとは聞いたが、俺の結界が破られるほどだとは聞いてないぞ！》

《魔族攻撃部隊長の名が泣くねミカエル》

《ああほんとにな！だからマントを脱いでスピカを気絶させたよ》

《お前！！スピカは女だぞ！気をつけろよ！》

《どうした？魔族長殿？うん？何時にない慌てぶりだな》

《うるさい、早く修行を終えて帰ってこいお前のまわりは教育上よくない！》

《ずいぶんと過保護だな、こりゃあ楽しみだ》

そう言うとミカエルは一方的に通信を途絶えさせ、スピカの顔を見た

（・・・・これが魔族長のお気に入りか・・・）

ミカエルの心にちょっとした悪戯心がわいた

スピカの形（後書き）

ミカエルがマントを脱いだシーンであの肉体美を想像されるといい感じになります
ミカエル大好きですってか筋肉大好き・・・見る専門ですが
これからはそんなマッチョがたくさん出てくる予定です
まぁ攻撃部隊ですからね・・・
ちなみにルサスはそんなにムキ向してません、適度な感じです

では次の更新までに間があくと思われますがよろしくお願いします
新シリーズもできれは読んでみてください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2541j/

新緑の森番

2010年10月15日22時29分発行